

# 「必ず村に戻るんだ」



ハッソさん一家が入居したばかりの仮設住宅(福島市で)

東日本大震災から5カ月、全村避難を余儀なくされた福島県飯館村の住民6200人は、農地や自宅を離れ、仮設住宅で避難生活を始めた。助け合いの絆で強く結ばれていた村へ家族一緒にいつ戻るのか。村の専業農家・佐野ハッソさん(62)一家を通じ、震災復興の在り方や課題を随時取り上げていく。

## あきらめない

7月30日、ハッソさんは夫の幸正さん(64)、義母のトミエさん(85)と、福島市の工業団地に造成された仮設住宅に入居した。マツチ箱のような家が118戸、長屋形式で並ぶ。砂利が敷かれた地面には土はおろ草一本も見えない。入居して間もなく、同じ棟のお年寄りが3回、家を間違え入ってきた。

お年寄りが多いことが気になっていったハッソさんに、村から集会所と談話室の活用を任された。「まだ手探りだけど、ここで意欲を持って暮らしていけるようなデイサービスも開いてみたい」。その一歩として入居者を訪問し、会話の糸口を模索し始めた。

## 避難生活も助け合って

入居者は70代や一人暮らしが多い。子どもを抱えた若い世代は放射能を避け一足早く村を出てしまった

村では夫と長男の裕さん(39)と3人で、水稲18畝、葉タバコ85坪、繁殖もと牛5頭を飼育してきた。7年前、長男がヒーターンしてから農地を集積し、耕作放棄

**メモ**  
飯館村 人口約6200人の純農山村。合併しない「自主自立」の村づくりを推進し、住民活動が活発。女性対象の海外研修事業「若妻の翼」はその一つ。

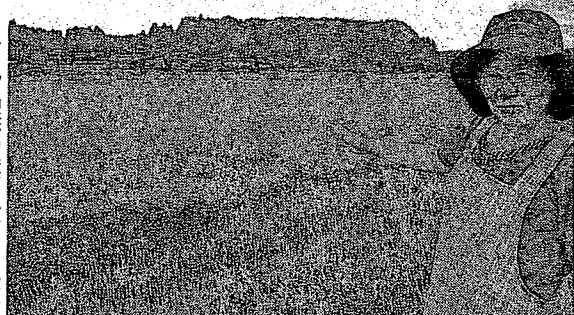
## 震災5カ月 福島県飯館村の佐野ハッソさん

月11日。「前日まで専門家の偉い人が来て、飯館村は大丈夫と聞かされていたのに」。11日、役場へ向かったハッソさんは、庁舎からあふれるマスコミ陣を目にして「大変なことになった」と実感した。

## 夫と一緒に 農業続ける

それでも農家は今までの生活を簡単に捨てることはできない。牛も犬もいる。高価な農業機械を残して離れられるのか。息子家族は現金収入を得るため栃木の牧場に就職できた。引越しの日、我慢していた涙があふれた。「父ちゃん、ここを守っていかなくちゃなんねえ」

地を含め11畝を規模拡大したさなかに原発事故は起きた。村は東京電力福島第一原子力発電所から40キロ。放射能とは無縁だと誰も疑わなかった。政府が村を計画的避難区域に指定したのは4



ハッソさん名義の葉タバコ畑。草が茂っているが例年なら今が収穫最盛期だ(福島県飯館村で)

村がお嫁さんにプレゼントした「若妻の翼」体験だ。ハッソさんはこの第一弾で1989年にドイツ、フランスに渡った19人の一人。そこで豊かさばかりから与えられるのではなく、自分がつくっていくものと教えられた。「わたしらは土から離れらんねえの。諦めない、必ず村に戻るんだ」

## 来年の全国集会で 佐野さんが講演

### 「女の階段」

来年3月5、6の両日、新潟市で開く第14回「女の階段」愛読者の全国集会で、佐野ハッソさんが記念講演する。東日本大震災から1年目の開催で復興をテーマに語る。佐野さんは「これから喜んだり悲しんだり、浮き沈みがあるが、それをばねにします」と集会を楽しみにしている。